



領家 穰教授

## 領家 穰教授記念号によせて

社会学部長 遠藤 惣一

領家穰先生は、本年3月、定年の一年前に退職されることになりました。関西学院大学には実に31年の長きにわたって在職されました。学部を代表して感謝の意を表したいと思います。

領家先生は1943年に第一高等学校をご卒業後、東北大学法文学部に在籍中、臨時徴集現役兵として兵役につかれ、敗戦後除隊となった1946年に京都大学文学部哲学科（社会学専攻）に入学され、1949年同学部を卒業されました。卒業と同時に先生は大阪大学文学部に助手として着任されました。大阪大学の助手時代が10年間続いた後、1959年に関西学院大学文学部の専任講師に迎えられ、1960年社会学の発足とともに同学部助教授、1965年教授に昇進されました。また1968年大学院修士課程指導教授、1973年博士課程指導教授になりました。

領家先生の研究の専門領域は、広く言えば理論社会学ということになると思いますが、先生が一貫して追求されてきたのは、社会学の方法という社会学の学問論の展開ということになるのではないかと思います。とくに既存の確立した方法の自明性の前提に対する徹底的な疑問と挑戦が基礎となっていると拝察します。このことは、先生のライフワークとなっている部落問題への取組みの基本的視座となっていて、あらゆる前提と拘束から自由になる方法としての「誤解」の検討を方法論の中心に据えるという独自の立場が成立しているように思います。先生の部落問題への取組みは、第一に学問としての先生の社会学の方法による本格的な調査研究の集積として結実しており、『社会的差別とはなにか』を初めとした著書や1964年に朝日賞を受賞された論文『農村部落その地域と社会（松坂市同和地区実態調査報告）』他多数の論文を発表されており、部落問題の社会学者としては代表的人物の一人であります。しかし、先生の中にあるものは、部落問題が単に学問によって客観化される対象ではなく、学問と自分と対象となる部落問題が串差しのように一体化することを厳しく求める姿勢であり、それこそが先生にとって第一義的なことのように思われます。

領家先生の学問的関心はそれにとどまらず「社会的時間論」に多くの精力を割かれ、これに関する論文を幾つか発表されています。また先生は若い頃から社会学方法論における自然科学的方法の問題に関心を払われ、その延長線上の問題としてサイバネティクスを早

くから取り上げ、研究されています。そういう意味で、先生は通常の社会学にとっては異端者であり、いわゆる「へそ曲がり」ということになりましょう。パーソンズ社会学全盛の頃にいち早くルーマンに着目しこれを評価されたのは単なる先見の明というより、既存社会学への不信頼の精神の成せる業といえなくもないような気がします。

もう一つ、領家先生の学問に不可欠のものとして蔵内数太先生との出会いと関わりであります。先生と蔵内先生との出会いは大阪大学の助手時代であったと聞きます。自来先生にとって蔵内社会学は不可分のものとして先生の中に取り込まれており、先生との話の中にいまでも蔵内先生の名が出ないことはないといっても間違いのないくらいです。1985年の現代社会学19号に発表された『蔵内社会学の基底にあるもの』という論文はまさにこのことを示しているように思います。

領家先生はその人柄、人物においても桁外れのところがあり、先生については伝説的逸話がいくつかあり、軍隊時代の豪傑ぶりや終戦直後の物不足の京大時代に某神域の鯉で下宿生一同で鯉こく料理をする冒険を冒したり、古く朽ちた紅殻の鳥居を薪にと持ち帰って下宿のおばさんの壺を買い、阪大助手時代の猛暑の夏期にふんどし一つで校内を闊歩し、そのままの格好で主任教授の研究室に出入りしたとか、関学時代になってからは血気盛んな助教授の時の上下を無視した激しい議論や教授会で報告事項の時は当たりに鳴り響くいびきをかきながら審議事項になるといつのまにか議論に加わり長広舌を振るうといったようなことは枚挙にいとまない程であります。お酒は今も斗酒を辞せず、飲む程に談論風発、行き付く先を知らずというように先生の持論が展開していくのをわれわれは酒半分、話半分で楽しむのが常であります。しかし先生は豪快に見えて、本質は大変神経のこまやかなところがあり、そういう意味で極めてパラドキシカルなパーソナリティの持ち主でもあります。

領家先生が定年前に本学を去られることはわれわれにとって大変な痛手であり、特に部落問題の学内の取組みに余人をもって変え難い存在であっただけになおさらであります。先生の今後のさらなる発展を念じつつ、先生を送り出したいと思います。先生、また一緒に飲む機会を楽しみにしています。